

第Ⅱ部 離婚および離婚家庭に対する意識調査

第1章 調査の目的と調査の概要

第1節 調査の目的

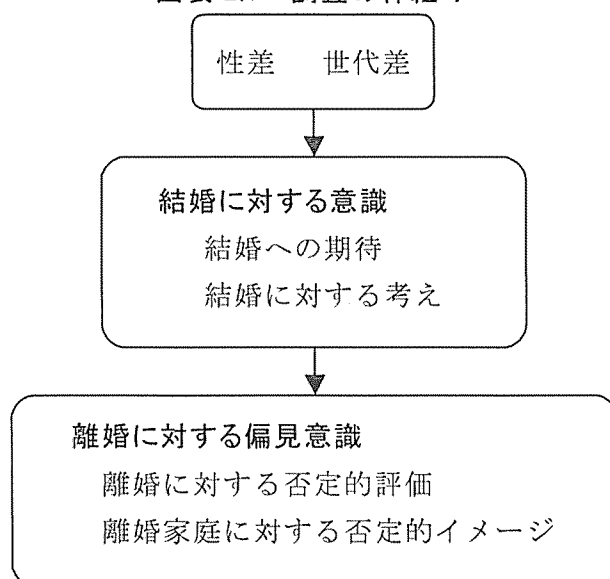
日本では、離婚を恥とする風潮も減少し、離婚に対する許容度が緩和されてきているが、一方で、離婚や離婚家庭に対して過度の一般化がなされ、画一的で偏った見方がされやすい。いちど形成された否定的な印象は容易には修正されず、離婚家庭の親と子どもは、このような周囲からの歪んだまなざしによって、新しい生活への適応が難しくなっている。そこで本研究では、離婚家庭への理解と支援のために、離婚および離婚家庭に対する偏見意識の実態と偏見意識の形成に関与する要因について検討することを目的とする。

第2節 調査の枠組み

本調査では、離婚と結婚に関する先行研究と、大学生と一般成人を対象にした「離婚と離婚家庭に対するイメージ」の予備調査の結果から、図表 2.1 に示す調査枠組みを設定し、調査票を作成した。

調査では、離婚に対する偏見意識を測定項目とし、偏見意識の構造とその形成に関与する諸要因を検討した。離婚に対する偏見意識の構造については、離婚そのものに対する否定的評価と離婚家庭に対する否定的イメージによって構成されていると想定した。離婚に対する偏見意識を形成する要因としては、男女差と世代差、および結婚に対する意識を想定した。なお、この調査では、離婚に対する偏見意識に関与する要因として、結婚に対する意識以外についても測定したが、本稿では以下の枠組みに基づいて、結婚に対する意識のみを取り上げて報告する。結婚に対する意識は、結婚への期待度と結婚に対する考えによって構成されていると想定した。そして、男性と女性、若い世代と年輩の世代では、この結婚に対する意識に差異があると考え、この結婚をめぐる意識の違いが、離婚に対する偏見意識を規定していると仮定した。なお、成人を対象とした調査では、学生を対象とした調査の結果を踏まえ、質問項目を取捨選択して調査を行った。

図表 2.1 調査の枠組み



第2章 学生調査

第1節 調査の実施状況

1. 調査対象者

埼玉県にある共学私立大学2校の学部生を対象とした心理学の講義を受講している大学生。

2. 調査方法と期間

各大学の講義時間の一部を用い、講義の担当教官によって集団法で実施された。回答はいずれも無記名で行われた。調査期間は、2000年6月から7月であった。

3. 有効回答者数

646名（男子236名、女子410名）。平均年齢は19.82（18～33）歳であった。

本報告書における統計的検定の結果の記述は、有意水準5%を基準とし、5%水準に*印を、1%水準に**印を、0.1%水準に***を付記した。なお、各質問項目に対する回答の性差を検討する際には、t検定を用いた。

第2節 離婚に対する意識

1. 離婚に対する意識の実態

(1) 離婚に対する考え(Q2)

① 離婚に対する考えの全体的傾向

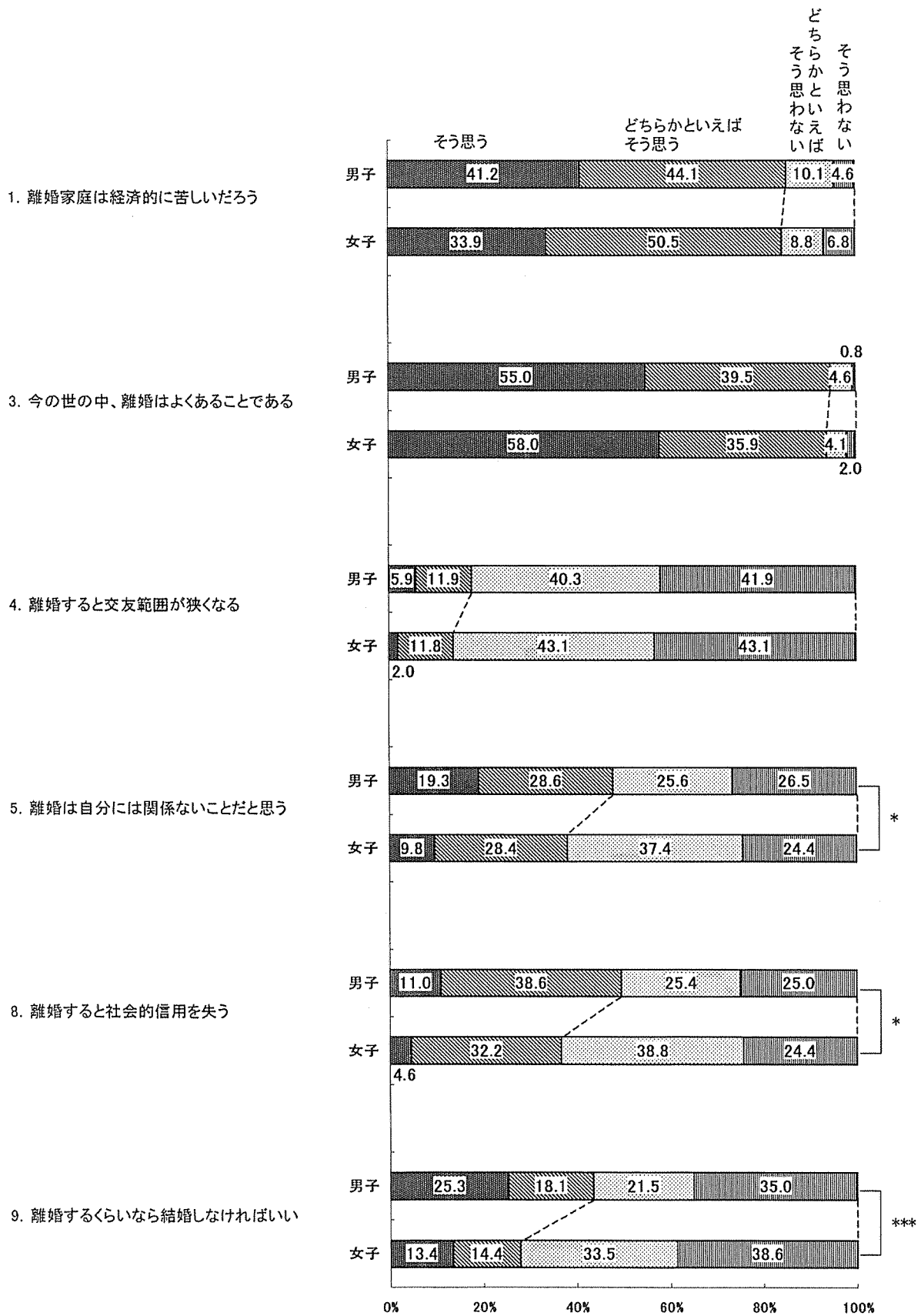
9割前後の学生が、「今の世の中、離婚はよくあること」、「離婚して幸せになれるのなら、離婚してもいい」と考え、「離婚した人は、人生の敗北者である」、「離婚は、恥ずかしいことである」、「離婚家庭の人とは、付き合いたくない」という意見に反対していた。また、約9割の学生が、「離婚することで、人間的に成長する」、「離婚は、人生の再出発」と感じていた。しかしその一方で、9割前後の学生が、「離婚家庭は、経済的に苦しい」、「離婚家庭の親は、ひとりで両親の役割をにない苦勞している」と感じ、約6割の学生が、「離婚だけは、どんなことがあっても避けたい」と回答し、「離婚すると女性の方が、男性よりも苦勞する」と約7割強の学生が感じていた。

以上のように、大学生は離婚に対して許容的であり、否定的な意識は少ない。そして、離婚による人間的成長や人生の再出発としての意味を感じており、離婚のプラスの側面も認識していた。しかし、離婚すると苦勞するので、自分自身は避けたいと回答していた。つまり、離婚に対して否定的な感情や偏見はないが、自分としては回避したいと考えていた。

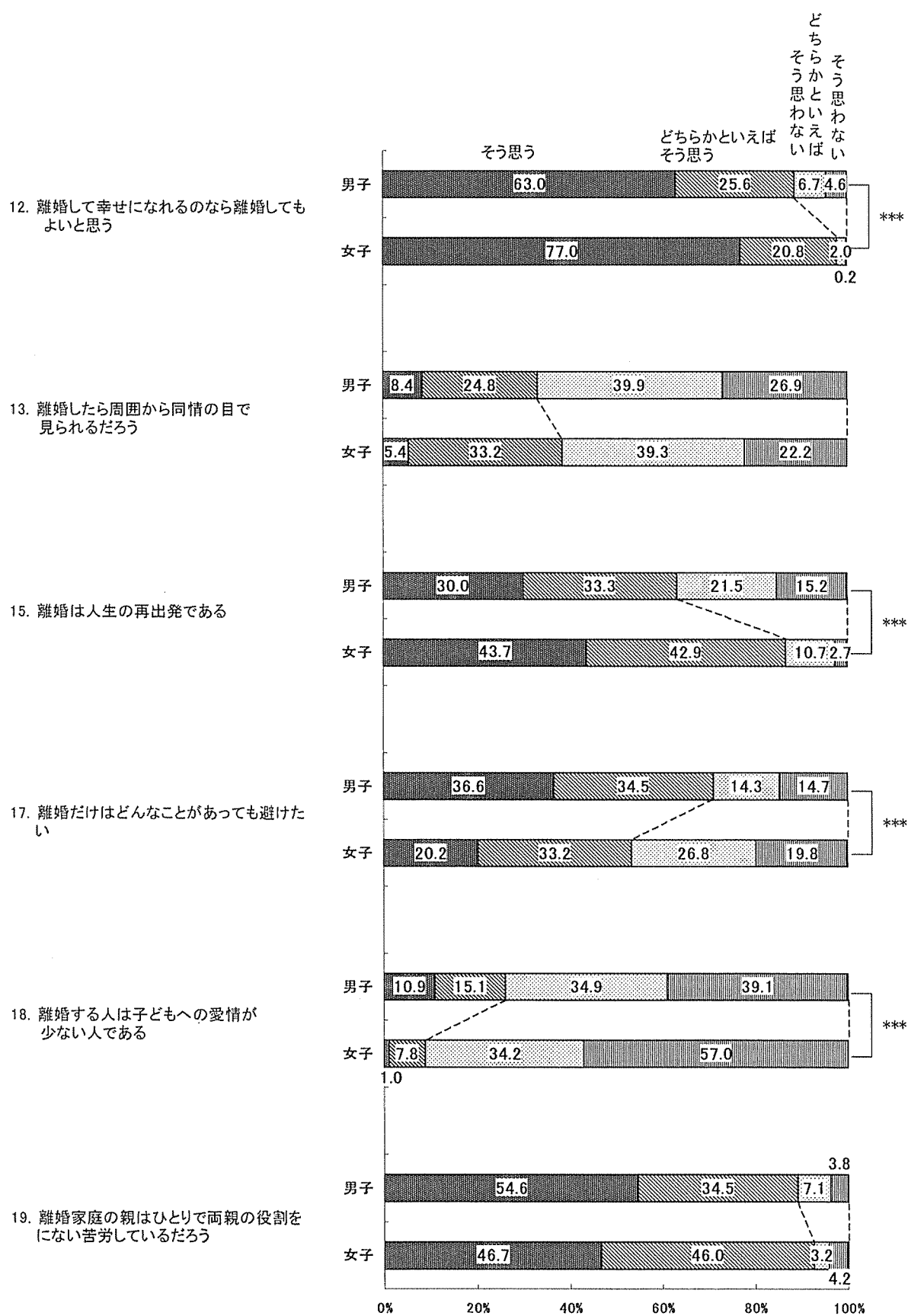
② 離婚に対する考えにおける性差

男女別に見た各質問項目に対する回答結果を図表2.2に示す。

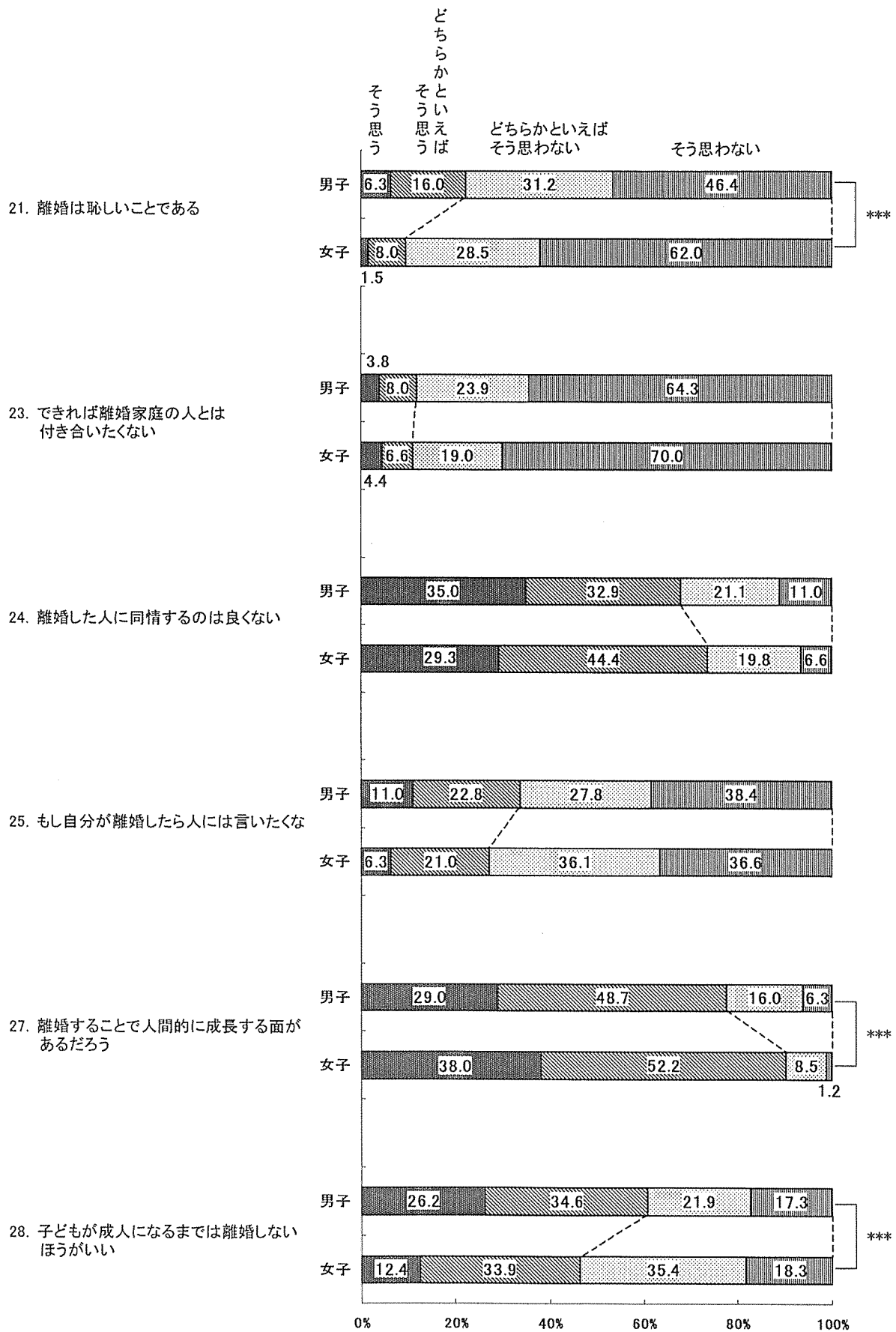
図表 2.2a 男女別みた離婚に対する考え(Q2)



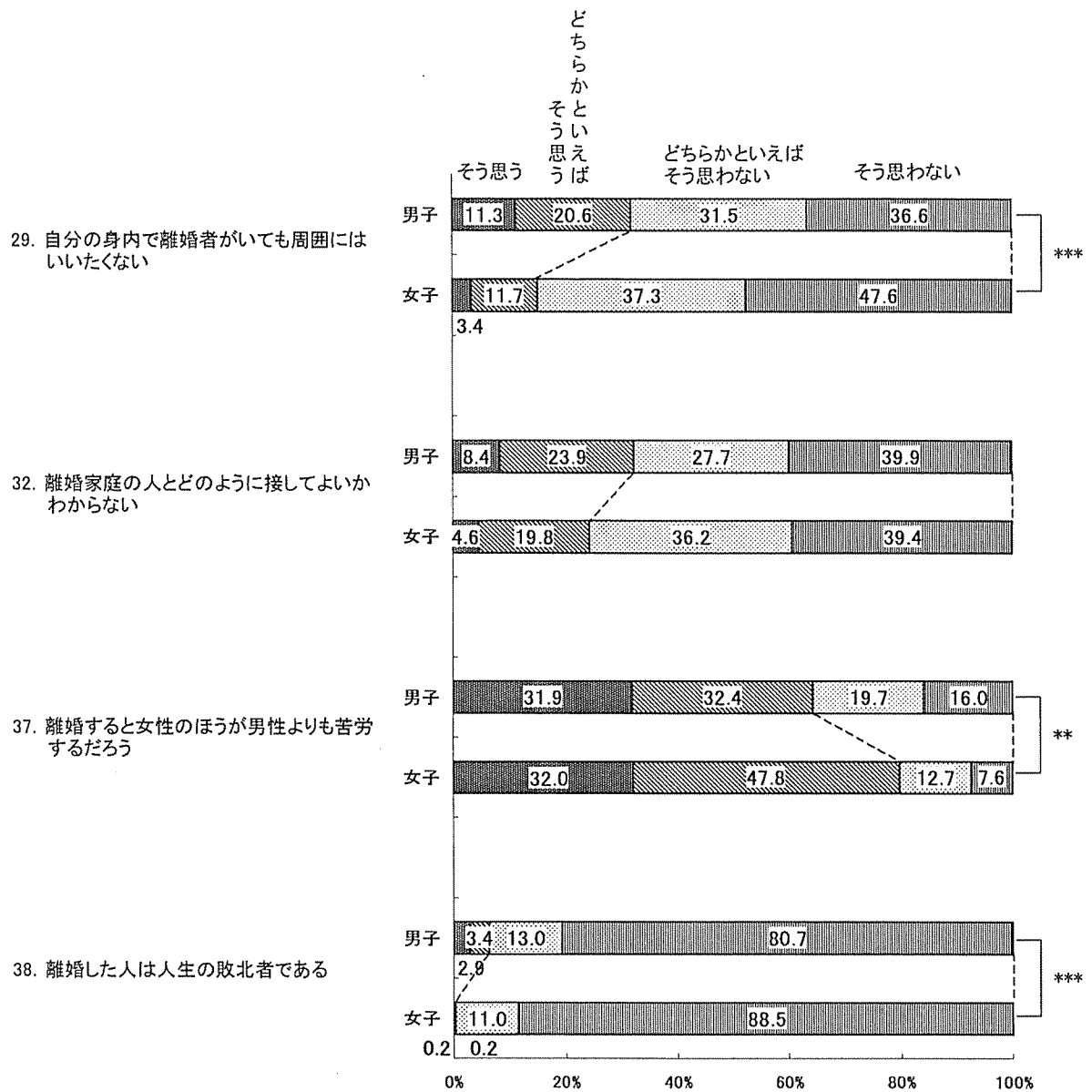
図表 2.2b 男女別みた離婚に対する考え(Q2) (続き)



図表 2.2c 男女別みた離婚に対する考え(Q2) (続き)



図表 2.2d 男女別みた離婚に対する考え(Q2)(続き)



図表 2.2 に見られるように、男子は女子に比べると、離婚に対する抵抗感、嫌悪感が強く、離婚は避けたいし、離婚が周囲に知られると世間体が悪いと考えている。一方、女子は男子に比べると、離婚に対して寛容で、状況によっては仕方がないと認識しているが、離婚すると女性の方が男性よりも苦勞すると強く感じている。

(2) 離婚する原因に対する考え(Q2)

① 離婚する原因に対する考えの全体的傾向

8割強の学生が、「離婚する人は、子どもへの愛情が少ない人である」という意見には反対していたが、その他の意見「安易な気持ちで結婚する人が、離婚する」、「性格的に問題がある人が、離婚する」などについては、賛成と反対が概ね半々となった。このように大学生は、離婚の原因については明確な考えを持っていなかった。